

## プラトンとアリストテレスにおける 「顔 (πρόσωπον)」の用例研究

中西 捷渡

広島大学大学院文学研究科博士課程前期

### はじめに

「人格 person」および「人格性 personality」は、近代以降（特にカント以降）の倫理思想において、道德の当事者であるところの存在者やある存在者をそのようなものたらしめる性質として、きわめて重要な役割を果たしてきた。このような概念を表す語として用いられている “person” の語源がラテン語の “persona” であることは一見して明らかである。そしてその “persona” はギリシア語 “πρόσωπον” の対応語として、概ね共通の語義を持っていたということも知られている。

古代におけるこれらの言葉について指摘されていることをいくつか紹介すると、次の通りとなる。

まず、πρόσωπον の語義は、大別すると①（原則として、人間の）顔、②仮面、③人格という三つの領域に分けられる<sup>1</sup>。語義発展の順序としては、人間の顔という原義から、演劇における人工の顔を指す仮面という語義が生じ、最後にその人の人間社会における立ち位置に関する限りでの人格の用法が発生したとされている<sup>2</sup>。この発展過程において重要な特徴として指摘されることは、ホメロスにおける最初の用例から新約聖書に至るまで一貫して、πρόσωπον の語が人間概念と強い結びつきをもっていたことである<sup>3</sup>。

persona に「物件 res」とは区別された権利主体およびその役割を果たす具体的個人としての用法が明確に確認できる文献の一つとして 2 世紀の法学者ガイウスの『法学提要』が挙げられる<sup>4</sup>。また、人物を表す用法はガイウスよりさらにさかのぼって 1 世紀の後期ストア派の思想家セネカにも見られる<sup>5</sup>。ただし、

ネドンセルによれば、このようにローマ人が「顔」を「個人」の意味で用い始めるよりも2世紀ほど前にすでにギリシア人による用例が確認される<sup>6</sup>。

なお、古代以後、現代までの発展の概略は次のようになる。まず、古代後期から中世にかけて *πρόσωπον* / *persona* は、倫理学や法学ではなく、主にキリスト教の神学において言及されるようになる。この文脈では、三位一体論における神の「位格」を表す用語として用いられた。続いて近代に入ると再び倫理学の重要概念として論考が行われるようになり、倫理学上の人格概念は心理学的・法学的側面からの説明が行われるようになった。

近代に倫理学上の主要概念となった人格概念は当初、「人格」という訳語が示唆するように、理性を備えた人間に対してのみ適用されるものであったが、現代ではそのような人間のみならず胎児や動物、場合によってはロボットに対しても用いられるようになっている。

以上見てきたように、人格概念は哲学史上に登場して以来、言葉の上では「顔」を原義とする語である *πρόσωπον* / *persona* を通して表されてきた。この言葉の日常語における語義には上述の通り3つの意味領域があり、そのいずれかが人格概念の成立に関して重要な役割を果たしていると考えられる。そこでこの研究ノートでは、*πρόσωπον* の持つどの語義がどのような仕方で人格概念の形成に関係したのかを検討する準備的考察として、プラトンとアリストテレスにおける *πρόσωπον* という語の用例を調査する。

## 1. プラトンにおける用例の検討

プラトンにおける *πρόσωπον* の用例は、詩句の引用を除けば、確認できた限りで29回見られる。プラトンの用例は、上述のおおまかな語義区分（①顔、②仮面、③人格）で見ると、すべて①に分類できる。さらに詳細に分類すると、この①はさらに次のように区分できる（略号はLSJにおける表記を採用した）。

表 1

	語義区分	該当箇所
(a)	単なる身体の一部としての顔面およびその部分についての記述（＝「顔面」）	Alc. 1, 132E; Cra., 439D; Hp. Ma., 290B; Lg., IX, 854D; Prt., 329D, E, 330A, 331D, 333A, 349C, 352A; Smp., 189E, 190A, E(2回), 211A; Ti., 45A, 46B, C, 75D.

(b)	顔立ちについての記述（＝「容貌」）	Phdr., 251A; Plt., 257D; R., X, 601B; Tht., 144D, E.
(c)	表情およびその現れる場としての顔についての記述（＝「表情」）	Euthd., 275E; Phd., 117B.
(d)	その人自身としての内心に対する外面としての顔についての記述（＝「外面」）	Alc. 1, 130E

πρόσωπον の語義拡張に三段階を想定した場合、プラトンの用例はすべて第一段階のものである。また、固有の意味を持った術語として用いられているわけではないようである。(a)(b)(c)それぞれの用法は、「顔」という言葉の使い方としてまったく自然なバリエーションであり、各分類項目に特別な説明は必要ない。

しかし、(d)の用法は、前三者とは趣が異なる。(a)(b)(c)の用例は身体の一部を指示していたのに対し、(d)の用法は、本来の指示部位を超えてその人全体を指示していると言える。そこで、(a)(b)(c)の用例中で注目に値するものを検討する前に、まずはやや異質な(d)の用例を検討したい。

## 魂と身体

(d)の用例が他の用例と比べて異質であることは上に述べた通りだが、この用例はプラトンにおける πρόσωπον の理解を検討するうえで、なにか有益な情報を秘めているのだろうか。まずはこの用例が見られる議論の流れを確認し、次いで用例の意義を検討する。

ソクラテス それでは、心が人間だということは、もっと何か明確な証明を必要とするだろうか。

.....

ソクラテス .....そしてたぶんこれで足りるだろう。なぜなら、われわれが自身の主となるものとしては、心よりももっと適格なものを、何ひとつわれわれは挙げることはできないだろうと思うからだ。

.....

ソクラテス つまりこれが、少し前にもわれわれが言ったことだったのだ。ソクラテスはアルキビアデスと、言論を用いて問答しているというのがそれであつたが、これはきみの**外面[πρόσωπον]**を相手に言論をしているのではなく—と見るわけであるが—むしろアルキビアデスその人を相手にしているわけで、それはまた君の心を相手にすることなのだ。(Alc. 1., 130C-E) <sup>7</sup>

まず、議論の文脈を確認する。用例は「アルキビアデス (1)」の後半部分から採られたものであり、そこでの議論の主題は「『自身』とはなにか」ということである。ソクラテスとアルキビアデスは問答を通じて、自己が肉体でも肉体と精神の総体でもないことを確認し、最終的に自己を精神と同定するに至る。

この引用においては、πρόσωπον が真の意味での「人間自身」である精神と対立的に用いられている。ただし、ここでの πρόσωπον は本来の「顔」ではなく、異なった意味で用いられている。ちょうど日本語で「おもて」が本来の「顔」という意味を表すとともに、そこからの連想で「表面」という意味をも表すような転義が行われているのである。したがって、ここでの πρόσωπον は固有の意味ではなく、「身体 (σῶμα)」をその一部分である「顔」によって代表させていると解釈するのが妥当である。すると、ここでは厳密には自己自身と顔ではなく、自己自身と肉体一般が対立しているということになる。

## 魂と外界の接点としての顔

プラトンの用例でもう一つ興味深いものは、『ティマイオス』における πρόσωπον の説明である。この用例は、分類上(a)の顔面を表す用法だが、ここでは単なる解剖学的なレベルを超えて、この部位が持つ価値的側面についても言及されている。以下に挙げるのは、ティマイオスが肉体の諸部分の形成について、神話的・目的論的な説明を行う場面からの引用である。

さて、神々は、二つあるこの神的な[魂の]循環運動[「同」の軌道・「異」の軌道]を、万有の形が丸いのに倣って、球形をした身体に結びつけました。これこそわれわれがいま「頭」と名づけているところのものでして、最も神的なものであり、またわれわれのうちのいっさいのものに君臨するところのものなのです。そして神々は、その頭に奉仕するものとしてまた、身体全体をひとまとめにして与えました。頭というものが、将来あるはず

のすべての運動に関与することになると気づいたからです。そこで……それに乗り物として身体を与えて、動きやすいようにしてやったわけなのです。……つまり、そういう四肢を使って、掴んだり、自分を支えたりしながら、それは、最も神的な、最も聖なるものの住居をわれわれの天辺にただいて運びつつ、あらゆる場所を通して進んで行けるようになったのです。

さて、……神々は、後方よりも前方の方がいっそう尊く、また指導役として、よりふさわしいと考えましたから、われわれの進行をおおむねその方向に向かうようにしました。……神々はまず、頭の鉢ではそちら[前]の側に顔[πρόσωπον]を取り付け、魂がどんな先々への配慮でもできるように、いろいろな器官をその中に固着し、そして、指導の任にあずかるのは、この本来的に前である側だと決めました。(Ti., 44D-45B)<sup>8</sup>

「アルキビアデス (1)」からの引用で見た通り、肉体は真の意味での自己である魂に対置されるものであり、顔もまた肉体の一部として対立していた。しかしこの用例では、顔が魂に対して持つ特別な関係と身体諸部分に対して占める特別な地位が強調されている。

まず、顔を有する頭部は魂の座として創造されており、胴体や四肢は頭部に奉仕するために設けられた器官であるとしたうえで、顔を魂の最も近くで最も重要な用務に服する器官として説明する。顔は様々な感覚器官を備えた部位であるが、そのような造りになっているのは、魂が将来の出来事を見通せるように、様々な情報を捉えて、頭の内部に宿る魂へと伝達するためである。

顔にある諸器官のうち最重要の器官として第一に創造されたのが眼である(Ti., 45B)。眼は視覚をつかさどる器官であり、その仕組みについては、眼を通り道として頭部に込められた魂である「純粋な火」が外へ出て行き、物体から放たれた「穏やかな光」としての火が出会うことによって映像が生じると説明される。したがって、眼は魂と外界を結ぶ境界面であり、さらには眼やその他の感覚器官を有する顔全体が、魂と外界との境界面となっていると言える。

魂と最も親密な身体部位としての顔は、将来に関する魂の働きに関与している。ここに、顔と魂の知的能力（とりわけ、「推論 λογισμός」の能力である「理性 λόγος」）との親和性を読み取ることができる。理性は、ギリシア哲学の伝統において（ひいてはそれに連なる大部分の西洋哲学思想において）、人間を動物から差別化する際の主要な弁別要素とされる。それゆえ、顔は自己自身である

魂と密接なつながりを持つと共に、理性とも親和性をもっていると言える。

## プラトンの用例についてのまとめ

以上見てきたように、プラトンの用例では、顔は肉体の一部であり、自己自身と同一視されることもなければ、転義によって仮面を指すこともなかった。しかし、腕や足などの肉体の他の部分と比べると、特別な価値を持っていた可能性が指摘できる。この価値の源は、プラトンにおいては魂が頭部に宿り、多様な感覚器官を備えた顔面が魂と外界とのインターフェースとしての役割を担っているという想定に由来すると考えられる。ただし、*πρόσωπον* という語が人間以外にも適用可能かどうかについては明言されておらず、用例においてはすべて人間に対して適用されていると帰納的に言えるのみである。

## 2. アリストテレスにおける用例の検討

アリストテレスにおいて、*πρόσωπον* は特に自然学系の著作で多用されるほか、『詩学』『弁論術』などで用いられる。前者の場合はすべて身体器官としての顔を意味しているが、後者では仮面の意味にも用いられる。この点で、アリストテレスの用法では語義拡張の第二段階まで反映されているが、しかし、いまだ人格としての用法は現れておらず、またプラトンに見られなかった仮面を表す用例についても、特別な含意は読み取れない<sup>9</sup>。仮面の用法が確認されるようになったのは、アリストテレスがそのような用法を必要とする分野の論考を行っているからに過ぎないと思われる。そこで、以下ではアリストテレスにおける顔面を表す *πρόσωπον* の用例のうち、その部位の特異な地位に関するものについて検討していく。

## 顔と人間の繋がり

アリストテレスの *πρόσωπον* 理解は、以下の箇所です端的に表現されている。

さて、頭にある、その他の部分については大体のべ終えたが、人間では頭と頸の間を顔[*πρόσωπον*]といい、これはおそらくその動作からきた名であろうと思われる。なぜなら、動物中で人類だけが直立しているので、前を見[*πρόσωθεν ὁπωπε*]、前へ向かって声を出すからである。(PA, 662b19-20)<sup>10</sup>

一つ目の引用文から読みとれるように、アリストテレスの説明は、プラトン

が対話編の登場人物に語らせたものとは違い、神話性を伴わない経験科学的見地に立脚している。アリストテレスの理解によれば、*πρόσωπον* はヒトの顔のみを指すものであった。そしてその語の定義は「頭と頸の間を指す部位」であるとされ、その語源は、動物のなかでヒトに固有なものである直立姿勢<sup>11</sup>による諸動作によると説明されている。古代の間、*πρόσωπον* は原則として人間（およびしばしば神）の顔のみに使われたという説明はすでに紹介した。上で検討したように、プラトンの用例はこの原則に一致していた。そしてこのアリストテレスの説明も、神話的な解釈が経験科学的な解釈に置き換わったとはいえ、その原則に一致している。原則に一致した言明としてはさらに次の例が挙げられる。

頭蓋の下部分を顔[*πρόσωπον*]というのは、動物中でヒトの場合だけである。事実、魚やウシでは *πρόσωπον* とはいわない。(HA, 491b) <sup>12</sup>

この引用文は *πρόσωπον* の適用条件を述べるものであり、上記の定義および語源説に即している。ところがアリストテレスの用法はこの適用条件に常に沿っている訳ではない。というのも、アリストテレスは *πρόσωπον* という用語を、ヒトのみならず、サル、シカ、イヌ、ライオン、カメレオン、ロブスター、さらにはこれらの動物の外観を備えた伝聞上の珍獣にも適用しているからである。これらの用例は明らかに適用条件に反している。

これらの用例のうち、上記の説明と整合的な解釈の可能性を見いだせるものとしては、サルの用例が挙げられる。その記述は以下の通りである。

或る動物はヒトと四足類の性質を兼ねている。たとえばサルやオナガザルやイヌザル〔ヒヒ〕である。オナガザルは尾のあるサルである。またイヌザルはサルと同じ形であるが、ただ身体がもっと大きくて力強く、顔[*πρόσωπον*]はもっとイヌに近く、そのうえ習性はもっとどう猛で、歯はもっとイヌに近く、もっと力強い。

サルは……顔[*πρόσωπον*]は多くの点でヒトに似ている。即ち、鼻も耳もヒトに近いし、歯は前歯も釘歯〔臼歯〕もヒトのようである。(HA, 502a16-30)

アリストテレスは *πρόσωπον* という語の適用条件をヒトに限定したにもかか

ならず、明らかにヒト以外の動物であるところのサルにこの言葉を用いているが、この用法はアリストテレスの説明の枠内で整合的な解釈を試みることができる。すなわち、すでに引用した箇所にあるように、四足類<sup>13</sup>であるウシや、四足類よりさらに下等な無足類である魚は πρόσωπον を持たないが、しかし、サルはヒトと四足類の中間の生き物として両者の性質を併せ持っており外見的にもヒトに似ている。これらの類似点から、サルの顔は πρόσωπον と呼ぶことができる」と解釈することで、少なくともこの箇所に関しては上記の定義の枠内に収めることができる。

サルへの適用とは異なり、これ以外の動物への適用例は、アリストテレスによる πρόσωπον の説明と整合的に説明することが困難である。たしかにこれらの四足類もしくは多足類に属する動物の顔は前方を見るような格好をしているが、しかしこれを適用理由とした場合、ウシや魚の顔も同じ理由から πρόσωπον と呼ばれねばならないはずである。だがその場合、πρόσωπον の適用をヒトに限定する記述との矛盾が避けられなくなる。

では、この一貫性のない用例をどのように考えればよいだろうか。一つ考えられる原因としては、アリストテレスにおいては、πρόσωπον が「頭部 κεφαλή」のうち、「頭蓋 κεφαλή」と頸「αὐχὴν」の間の部位を指す解剖学上の術語であり、ヒトの顔のみが πρόσωπον と呼ばれるという記述は、必ずしも定義の一部をなすものではないということが挙げられる。アリストテレスの語法では、κεφαλή は広義には頭部全体を、狭義にはおおよそ現代の解剖学の区分で脳頭蓋と呼ばれる部分を指して用いられているのに対して、πρόσωπον は頭部のうち、現代の解剖学で顔面頭蓋という部分を指しているようである<sup>14</sup>。このように解釈すると、ヒトの顔のみを πρόσωπον と呼ぶという記述は、単に日常語での慣用に言及しているに過ぎない可能性も浮上する。

## 人の姿と神性

πρόσωπον を解剖学上の術語と見なす解釈が成り立つとすれば、アリストテレスにおいては πρόσωπον と人間とのあいだにはそれほど密接なつながりは無いように見える。しかし、人と πρόσωπον とが何か固有の結びつきを持っているかのような説明を、アリストテレスは単なる余談として2度も言及したのだろうか。以下では、このアリストテレスの説明を有意味なものとして処理できる可能性を検討する。

ここまで検討してきた限りでは、アリストテレスの人間理解においては

πρόσωπον という語それ自体に特別な地位が与えられているわけではなく、身体  
の部位を解剖学的観点で指示する用語として用いているように見える。アリス  
トテレスが現代的な意味での科学的態度をとっているならば、πρόσωπον と人間  
との関係の説明は、単に形態上の事実に基づく語源説を述べているに過ぎない  
ことになる。

しかし、アリストテレスの別の説明に目を向けると、これを必ずしも語源説  
としては処理できなくなる。『動物部分論』において、アリストテレスは姿勢に  
関する説明を行っている。それによれば、人間が動物中で唯一直立している  
ということは知性がもっとも優れていることの証とされる。というのも、魂の働  
きには火の力、すなわち熱が必要であり<sup>15</sup>、熱を多く持つものは軽いので上  
に向かうが、これと反対に土質のものは冷たく重いので、これを多く持つものは  
下に向かう。そして、土質のものが多くなるのに応じて体は重くなり、四足類、  
多足、無足類と生物としての程度が下がっていくからである<sup>16</sup>。ただし、アリス  
トテレスの説明では、以上のことが原因で人間がもっとも優れた知性に与ること  
になった、つまり神的性質を獲得したのではなく、反対に、人間が神的性質  
をもっているから、人間の身体は以上のような性質になっているとされるところ  
に注意しなければならない。

このことを踏まえると、人間の顔が、直立姿勢によって「前を見、前へ向か  
って声を出す」ような恰好になっているのは、事実の記述であると共に、価値  
的な含みも持つことになる。つまり、人間の顔の在り方は、人間の神的な性質  
を裏付ける証拠にもなっている。

## アリストテレスの用例についてのまとめ

アリストテレスの πρόσωπον の定義は解剖学的な観点でなされているため人  
間以外にも開かれており、彼は生物学系の著作では一貫してこの定義にしたが  
っている。その一方で、語源説や適用条件は、人間へのみ適用されるという想  
定を持っていたことを示している。したがって、アリストテレスにとって  
πρόσωπον は解剖学上の用語であると同時に、人間に適用された場合には特別な  
含意を伴っている可能性がある。ただし、この推測の是非は、今回の用例検討  
だけでは判断がつかない。というのもアリストテレスの πρόσωπον の用法のな  
かには、そうした語源説や適用条件との齟齬が認められるものがあり、人間と  
の独占的な結び付きの有無を確定することは難しいからである。

## おわりに

ここまで、プラトンとアリストテレスの *πρόσωπον* の用例を検討し、その理解を探ってきた。その結果、両者とも原則としては *πρόσωπον* を顔面という意味で理解していたこと、「顔面-知的能力-人間」という結び付きを想定していたことが見て取れた。しかし、ここで次のことに注意しなければならない。すなわち、プラトンの用例ではこの言葉は確かに人間のみを用いられていたが、人間以外への適用可能性の有無には言及していない。一方で、アリストテレスの場合、人間のみ適用すべきと言っておきながら、人間以外に適用した用例が多数見出される。つまり、両者の用法は、それぞれ異なった仕方で人間への *πρόσωπον* の独占的適用の原則に異論の余地を残すものであった。

ところで、アリストテレスとプラトンにおける *πρόσωπον* と人間の結合様式において中心的役割を果たすのは人間の知的能力であった。しかし人格概念では、それ以上に重要な要素は、その存在者がそれ自体として道徳的価値を持っているということである。それゆえ、「*πρόσωπον*-道徳的価値-人間」という結合もまた人格概念成立の契機として必要となる。他の動物に対する人間の優位はアリストテレスにおいて特に明確であったが、人間相互における価値についての言及は、今回の用例研究では明確には認められなかった。したがって、今回の調査の結果からは、プラトン・アリストテレスの *πρόσωπον* 理解は、人格概念の成立に決定的な貢献を果たしたわけではないと考えられる。

*πρόσωπον* の哲学用語としての使用は、少なくとも中期ストア派以降において確認されていることはすでに紹介した。彼らにおいては、一つの演劇の舞台としての世界との関係で *πρόσωπον* への言及が行われており、プラトン・アリストテレスとは力点の置き方が異なっている。そこで、今後は焦点をストア派に移し、その思想の中で *πρόσωπον* がどのような機能を果たしているかを検討していきたい。

## 参考文献

### テキスト・翻訳

Becker, I., *Corpus Alistotelicum*, tomus 1-2, Berlin, 1831

Burnet, J. (ed.), *Platonis Opera*, tomus 1-5, Oxford, 1900-7

Jouis, P. (ed., tra.), *Aristote: Histoire des Animaux*, tome 1-3, Paris, 1964-9

—— *Aristote: Les Parties des Animaux*, Paris, 1956

アリストテレス「異聞集」(『アリストテレス全集 10』) 福島保夫訳、岩波書店、

1969

——「動物誌」(『アリストテレス全集 7』『アリストテレス全集 8』) 島崎三郎訳、岩波書店、1968-9

——「動物部分論」(『アリストテレス全集 8』) 島崎三郎訳、岩波書店、1969  
プラトン「アルキビアデス (1)」(『プラトン全集 6』) 田中美知太郎訳、岩波書店、1975

——「ティマイオス」(『プラトン全集 12』) 種山恭子訳、岩波書店、1975

## 二次文献

Ast, F., *Lexicon platonicum sive vocum platoniarum index*, vol. 3, New York, 1835

Bonitz, H., *Index Aristotelicus*, 2nd ed., Graz, 1955

Forschner, M., “Der Begriff der Person in der Stoa”, in: Sturma, D. (Hrsg.), *Person: Philosophiegeschichte - Theoretische Philosophie - Praktische Philosophie*, Paderborn, 2001, S. 37-57

Hirzel, R., *Die Person: Begriff und Namen derselben in Altertum*, München, 1914

Lohse, E., “πρόσωπον”, in: Friedrich, G. (Hrsg.), *Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament*, Stuttgart, 1959, Bd. 6, S. 769-81

Nédoncelle, M., “Prosopon et persona dans l’antiquité classique : Essai de Bilan linguistique”, in: *Revue des Sciences Religieuses*, tome 22, fascicule 3-4, pp. 277-99

小倉貞秀『ペルソナ概念の歴史的形成：古代よりカント以前まで』以文社、2010  
ヨンパルト、ホセ『人間の尊厳と国家の権力』成文堂、1990

## 註

---

<sup>1</sup> Lohse, S. 769-71

<sup>2</sup> Ibid.

<sup>3</sup> Forschner, S. 41. Lohse, S. 770.

<sup>4</sup> ヨンパルト、p. 39-41

<sup>5</sup> 小倉、p. 12-3。ただし、ここでの用法の背後には、世界を神的理性が摂理 (providence) によって描き出す演劇の舞台とするストア派の世界観が反映されている。この点については、Forschner, S. 41 も参照。フォルシュナーによれば、少なくとも中期ストア派ではすでに πρόσωπον / persona に関する論考が確認される。

<sup>6</sup> Nédoncelle, pp. 281, 284. 本稿では取り扱わないが、ネドンセルはポリュビオスの用例を挙げている。

---

<sup>7</sup> 以下、『アルキビアデス (1)』の邦訳は、田中美知太郎訳（『プラトン全集 6』岩波書店、1975）より引用する。なお、[]内の補足および発言者名を除く本文のボールド体による強調は筆者による。

<sup>8</sup> 以下、『ティマイオス』の邦訳は、種山恭子訳（『プラトン全集 12』岩波書店、1975）より引用する。なお、[]内の補足および本文のボールド体による強調は筆者による。

<sup>9</sup> 仮面としての πρόσωπον が哲学上で初めて用語として用いられたのは中期ストア派においてであると考えられている。（Forschner, S. 42）哲学史に与えた影響はおそらくこのストア派の用法の方がプラトン、アリストテレスよりも大きいと思われる。

<sup>10</sup> 以下、『動物部分論』の邦訳は、（島崎三郎訳『アリストテレス全集』岩波書店、1969）より引用する。なお、本来の訳文にあったギリシア語の片仮名による音写は該当するギリシア語の単語に置き換え、他の引用に合わせて[]でくくり日本語に後置した。また、本文のボールド体による強調は筆者による。

<sup>11</sup> 直立姿勢は生物の本来の姿勢であるとされる。（PA, 656a11-2, 686a27-8）

<sup>12</sup> 以下、『動物誌』の邦訳は、（島崎三郎訳『アリストテレス全集』岩波書店、1969）より引用する。なお、本来の訳文に併記されたギリシア語の片仮名による音写は該当するギリシア語の単語に置き換え、他の引用に合わせて[]でくくり日本語に後置した。また、本文のボールド体による強調は筆者による。

<sup>13</sup> 「四足類」とは文字通り、ヒト以外の動物のうち、四足歩行するものをさす。アリストテレスの説明によれば、これらの動物は上体（頭から臀部までの部分）が大きく重いせいで直立できず、思考能力や感覚がヒトよりも鈍いとされる。反対にヒトは、神的本性にふさわしく思考を働かせることができるように、成人では上体と下体が釣り合って直立している。（PA, 686a28-686b11）

<sup>14</sup> 例えば、「[胎生] 四足類では、耳は頭から突き出し、目の上にあるように見える」（PA, 656b12-14）、毛髪が生えているので「ヒトの頭は動物の中で最も毛深い」（PA, 658b2-3）、眉毛は「頭からたれてくる水を避けるため」に生えている（PA, 658b15-6）などの記述や、HA, II, 11 の記述で耳は「頭の部分」（492a13）とされているのに対し鼻は「顔の部分」（492b5）とされていることから、κεφαλή と πρόσωπον のおおよその境界が推察される。

<sup>15</sup> PA, 652b9-13

<sup>16</sup> PA, 686a28-686b11